筆筆木筆で描く不思議のらかんたち

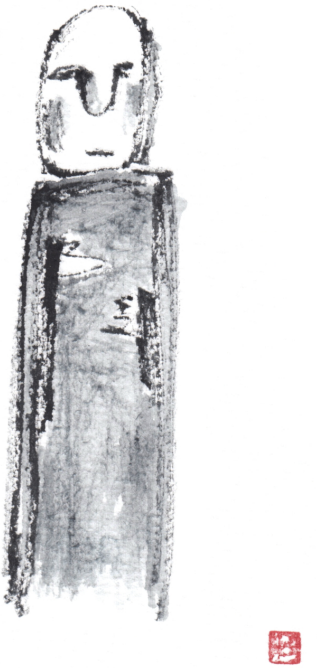
草画帖 38

栄代衣
号

蛍袋号です。
蛍の号も兼ねています。

星空へ水田へはぐれゆく螢

文字も蛍のように明滅して飛ぶ。



こころを闇になせば、星も蛍もひかりいづ。

わが心もホタルブクロの如し、また蛍の如し。

物おもへば沢の蛍も我が身よりあくがれいづるたまかとぞ見る

——和泉式部

きのこ（羅漢茸）

きのこが一本
羅漢場に生えた
石の色して
脆そうにもみえる
そうしていると
石仏みたいだ
羅漢みたいだ
きのこは
たった一本で生えたものだから
そう言われると
淋しさもどこかにいって
石仏みたいに
羅漢みたいに

でもここで
無想で立つのか
瞑想をするのか
来訪者への
愛想はどうするのか
いろいろ雑想が湧いてきた

○

きのこが仏になると
あら
毒仏かしら
食仏かしら
まじめなのか
からかっているのか
遠来の善女たちの声が降る

蛍飛ぶ家郷はるかな闇の中

昔から欲しい蛍のうつつなさ

夜空にも美しく蛍が群れ飛ぶ星団があるそうな。

蝶のように、蛍のように…

あれは星に紛れゆく蛍か、蛍に紛れ飛ぶ星か。

草話

異様に早い梅雨入で雨に飽きてきた。そうは言っても草木は喜び、こんな季節に蛍は繁殖し、鳥たちも二番子が跳びはねる。

＊

雨はたくさん降った。けれど言葉が降らない。言の葉だから、年々枯れていくものはある。精神のみどりも大切なことだ。

＊

河原枇杷男にこんな句がある。

身の中のまつ暗がりの蛍狩り

蕪村にもまた

掴みとりて心の闇のほたる哉

緑の黒髪という表現があるなら、緑の闇もあるだろう。まして心の中なら艶やかに。

＊

蛍の潜む草の闇、木の闇は美しい。蛍の舞う心の闇もそうだろう。わが心中に闇はあるか、闇は緑か、蛍は飛ぶか。

＊

この夏も蛍見に誘われた。あの光に触れて、あの飛翔に打たれてきた。そういえば、羅漢寺の前の水路にも少し前までは蛍を見た。昔はもっと出たそうだから、境内に迷い込んで石仏たちを楽しませることもあっただろう。

タツノオトシゴ陶印

俳句 白山鳥翁 ／ 絵 艸々子 ／ 詩 泉井小太郎

草画帖 第38号 2021年6月29日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039　Tel 0790-42-6008